

東熊会会員による「里帰り講話」概要

日 時 平成29年9月22日(金) 11:00～12:00
場 所 大津町立護川小学校
対 象 同校児童、教職員等
講 師 海老沢宏環境工房 取締役 海老沢小百合 氏
参加者 215名(児童176名、教職員等24名、コミュニ
ティ・スクール関係者5名)
テーマ きぼうのハンドルをもって



【講話概要】

夢の実現は、小学校の体験が原点。今、3つの仕事を行っている。「イラストレーター」「設計事務所」「エッセイスト」の3つとも創作に関わる仕事である。すべて小学校からの体験につながってる。

今までに携わった仕事、作品の紹介。服や傘のデザイン、本やガイドブックのイラスト、美術館、スタジオ、温泉館、老人ホームなどの紹介とそれにまつわる思いを語る。建築では、増築が一般的だが、地震の被害にあった建物の減築も行う。中国では、温泉を作ってほしいと依頼され、日本と文化の違いを踏まえて取り組んだ。

振り返ると、子どもの頃の夢が今につながっている。小さい頃から、絵を描くのが好きで、時間を忘れて集中して描いていた。これは、一生働く力、観察力を育てた。観察するうちに、いろいろな扉が開かれていった。

熊本の祭りの藤崎宮大祭「飾り馬」との出会いが、絵を描くことへのあこがれのスタートである。小学校2年生の時、担任の先生の横に行って「飾り馬」のことをずっとしゃべっていた。ある日、先生が、「祭りの行列の絵を描いてみて」と言われた。毎日居残りをして、ずっと描いていた。先生は、わりばしと墨と習字紙を用意されて、絶対手は出されなかった。そんなある日、教室を囲むように絵を描いた習字紙が貼ってあった。それを見て、気持ちがすーっと落ち着いていった。

絵に描けば友達に喜んでもらえる。絵に描くと気持ちが伝えられることを学んだ。これが出発点、言葉で表せないことを伝えられる。新しい発見であった。

自分の孫の話。3人いるが、3人とも興味関心が違う。それぞれ違うからおもしろい。

著書「記憶のパレット」にまつわる話。自分の祖父が、宮沢賢治に関わった人物であった。研究者にとって、謎の人物で、ひょっとすると賢二の作品のモデルになっているかもしれないという話を聞く。子どもの頃、祖父の家に泊まりに行っていた。今となっては、祖父のことを語れるのは自分しかいないということに気づく。祖父の家でいっぱい怒られて、いっぱいお手伝いをしたこと、それらを日記に書いていた。子どもの頃からの習慣で、じっと観察することが得意であった。50年前に祖父と過ごした日々も、観察を通して日記に残していた。宮沢賢治が熊本と縁があることを知り、親しく感じる。「エッセイストの海老沢さん」と言われるようになったきっかけである。

子どもの頃の夢中になること、乗り越える力になる。好きなことがみつかったら大事にしてほしい。わくわくする楽しい時間を過ごしてほしい。そのことが、将来につながると思う。つらいときでも、希望のハンドルを持って、そのハンドルをしっかり握って、行きたい方向に進んでほしい。

自分を幸せにするのは自分しかいない。自分は、まわり道をしてよかったということばかり。苦しいときも、苦勞と思わず、希望のハンドルを離さないで。最高の幸せを自分にプレゼントしてほしい。